

A. 0006

いんせきは引責でなく、隕石ですよ（政府高官などの引責辞任とかの、引責はそれ自体が保険なんぞの与り知らぬ行為の後始末なので、保険はありません）。

隕石保険は、あ・り・ま・す。単体単独ではありません。むかし、中国に杞（き）さんと言う人がいました。空が落っこってくるのではないかというのが心配の種で、憂鬱に暮らしていました。そこから、杞憂という言葉ができました。私たちは空が落っこちてこないことを知っています。なぜなら、既に落っこちてきているので、これ以上落ちることはないからです。引力の関係で気体（大気）は落ちてきており、地表に積もっているからです。それを私たちの周りにある大気を空気とっておりますが、まあ、根雪みたいなもんです。根雪になってなくて、ふわふわと薄い感じで、私たちの頭のう上に落ち、積もっている大気を、空と称しています。

あなたの心配は杞憂でなく、確率的には私が隕石にあたってケガをしたり、死んじゃう確率はゼロではありませんから、保険は成り立つはずです。

ですが、保険数理という観点からすると、ゼロでなくても、百万分の一なら無視して良い＝ゼロと見なしてよろしいということになっています。この国で、毎年120人以上の人が隕石に当たってケガしているのなら、保険会社は隕石保険をつくるかもしれません。いなくても、それでも単独の隕石保険をつくることはできます。保険料を設定するのも難儀、というか、てきと一、になるのですが、隕石保険を契約しようというひとは、さて、何人いるでしょうか？

1万人くらい集めることができるなら、ボクが作ってもいいですよ（恐竜を絶滅させたのは、巨大隕石とか言われています。そんな巨大隕石の場合は、たぶん保険金を受け取っても（ボクの遺族すら）使い道がなさそうなのが残念といえば残念です。

事象でなく時間的な確率からすると、6500万年(以上) 時間分の1の確率であることは、ほぼ「確からしい」です。この規模の隕石まで保険で面倒をみようとするのは、保険制度向き、あるいは人類向きではないと言えます。（うーん、なかなかむつかしいようです）。